



渡辺 大直

メディアから、一つ屋根の下に牛が住む「マヤ」の写真は無いかと問い合わせがあった。人と牛の深いつながりの証しとしてマヤの写真を使いたいという。だが残念ながら博物館にマヤの写真は無い。

しかし人と牛の深いつながりなら、むしろ但馬牛を農耕に使っていた時代の、子どもと牛の写真がふさわしいと思う。

弟をおんぶひもで背負い、子牛をなでるお姉ちゃんの優しい顔。放牧場で子牛と遊ぶ少年の笑い声が聞こえてきそうな笑顔。出荷前の子牛を一生懸命磨くけなげな姉弟、そして振り返りながら市にひかれて行く子牛を寂しげに見送る姉弟。

博物館には、牛との深いつ

ながりを雄弁に語る、子どもたちの素直な表情を捉えた写真がある。ところが電話取材の悲しさ、ディレクターの心には響かなかった。

元美方郡畜産農業協同組合連合会参事の松村義男さんは、若い時から但馬牛のさまざまな姿や人と牛が織りなす風景を撮り、今に伝えてくれている。

その中に、「よく撮ったなあ」と驚く一枚がある。それは巨大な種雄牛の綱を一人で持つ2歳ぐらいの男の子の写真だ。

牛が踏み出せば一瞬で踏みつぶされ、首を振っただけで吹っ飛ばされてしまうかもしれない。雄牛はちよつとしたことで事故につながる危険がある。

もちろん周りに大人がいただろうが、この写真に大人は

写っていない。よほど牛と信頼感が無ければこんな写真は撮れないだろう。いや信頼していたとしても撮れるものではない。

しかし男の子は綱を持つ手をグッと挙げ、しっかり牛を見ている。もう一人前の牛飼

みたいだ。牛もおとなしく立ち、やさし気なまなざしを男の子に向けている。あたかも綱を介して男の子と牛が信頼感で結ばれているようにすら見える。

その男の子がお孫さんを連れて博物館に來られた。



種雄牛の綱を持つ男の子

牛と絆で結ばれた暮らし

■筆者プロフィール■

わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

但馬牛の名が書物に登場したのは鎌倉時代。それからすればわずか半世紀ほど前まで、但馬には牛と家族同然の絆で結ばれた暮らしがあった。そんな農村の暮らしに托けこんだ但馬牛のありようが日本農業遺産に認められた。大切に後世に伝えたいと思う。

近くを発情した雌牛が通ったことに興奮した種雄牛が、つながれていたケタをへし折ったこともあったという。そんな種雄牛の荒々しい一面を見ながらも、共に暮らした生活が牛との信頼感を培ったのだろうか？

当時はまだ人工授精が普及していなかったため、町ごとに種付場があり、種雄牛が配置されていた。その方のお父さんが種雄牛を管理する仕事をなさっていて、物心ついた時には身近に種雄牛がいたそうだった。